談話の展開と予測能力について
－確認要求表現を用いた発話を中心に－（1）

瓜生 佳代

要 旨

聞き手は話し手の次の発話を予測しながら聞いているが、予測のしやすい談話の展開パターンがあるのではないだろうか。本稿では、確認要求表現「だろう／でしょう」を使った発話に注目し、その後に続く発話は予測しやすいのではないかという想定のもとに予測調査を行った。そして、後に聞き手への注意や提案などの働きかけがくる場合は予測が容易であり、後に自分の意見を続ける展開になっている場合は、内容によっては予測が困難になるという結果が得られ、発話の機能によって予測の難易が決まってくることが明らかになった。日本人と留学生とを比べてみると、留学生の予測は全体的に日本人よりも弱いが、発話の機能によって予測の難易が違ってくる点では日本人と同じであることがわかった。

【キーワード】予測、談話の展開、確認要求表現、発話の機能、働きかけ

1．はじめに

会話をしている時、我々は、相手が次にどんなことを言うのかを常にある程度予測しながら聞いている。聞き手が話し手の発話を先取りすることがあることもその表れである。その予測の手がかりは、語彙や文法、会話の展開パターンなどの知識、イントネーション、表情や身振り、先行文脈、場面・状況、常識など、その会話に関係するすべての要素だと言われている。(注1)

日本語教育においても、相手の次の発話を予測する能力を伸ばすことは、聴解能力、言語運用能力を伸ばすのに有効であると考えられ、予測能力についての研究が進められている。文法的知識に関しては、寺村（1987）をはじめすでにいくつかの調査報告がなされている。(注2) これらの研究は、主に文の範疇に限った考察であるが、平田（1991）は、ニュース文の予測について、談話単位での分析を行っている。本稿は、このような予測のメカニズムの解明をめざす研究の一つとして、一般の発話における、談話単位の予測について見ていくものである。

２．目的

我々は、相手の次の発話を予測しながら聞いているが、もちろん、いつも確実に予測できるわけではない。もし相手が自分の予測と違った発話をすればその発話をもとにまた新たな予測をたてていることになる。しかし、発話の中には、次の発話を待たずして、かなり正確に相手の言わんとしていることが伝わるものもある。例えば、「のどかわいたでしょう」という発話がなされた場合、次に、「何かを飲みませんか」という誘い、あるいは、「何か飲み物をどうぞ」という勧めの発話がくることは容易に予測される。これは相手の状況を確認して、その後に誘いや勧めなどの働きかけを行うという展開になっているものであるが、このような展開の場合は、確認の後に続く発話が比較的予測されやすいのではないだろうか。確認要求表現というのは、聞き手に自分と同様の認識を形成させる働きをする。(注3) そして、そこで提供される情報や、認識される情報は次の発話のための根拠や前提となる場合が多い。(注4) つまりその情報をもとに推論すれば、話し手の意図がつかめるようになっているのではないかと思われる。

そこで、本稿では、確認要求表現に注目し、その後に続く発話は予測が容易なのではないかという想定のもとに予測実験を行うことにした。確認要求表現は、「だろう／でしょう」に統一した。「だろう／でしょう」を用いた確認要求表現の後の発話を予測してもらい、どの程度予測可能なのかを見ること、日本語母語話者と外国人留学生の予測の比較を行うことが、本調査の目的である。

３．調査方法

日本語母語話者及び外国人留学生それぞれ２８名に対して予測テストを行った。被験者は、すべて２０代～４０代の女性である。留学生の被験者は、主にお茶の水女子大学の大学院生、研究生で、日本語で不自由なく講義を受けることができる中、上級の日本語能力を持つ学生に依頼した。(注5) テストはカセットテープに録音した発話を聞き、その後にどういう発話が続くかを予測して書くというものである。それぞれの発話の前には簡単な状況説明のナレーションを入れた。外国人留学生に対しては、わからない語彙があった場合、質問を受け付けることにした。確認要求表現を用いた発話に関する

予測テストは全部で１０問行ったが、今回は、そのうちの５問、後に聞き手への働きかけが続く場合と話し手の意見が続く場合の２つのパターンに絞って分析する。テストに用いた発話の談話展開は以下のようになっている。

テスト１：聞き手と話し手双方のかかわった事実について確認し、その後に質問（非難）が続くもの。

テスト２：現場の事実の確認をし，そのあとに相手への注意が続くもの。

テスト３：相手の気持ちの確認をし、そのあとに相手への勧めが続くもの。

テスト５、６：聞き手に関する事実／一般的事実の確認のあとに自分の意見を述べているもの。

なお、テストの発話は、映画から録音したもの（テスト１、２）、シナリオを読んでもらい録音したもの（テスト３）、ラジオのトーク番組を録音したもの（テスト５、６）を用いた。

４．調査結果と考察

予測テストの結果は、次の４段階に分けて評価した。

Ａ．内容がオリジナルの発話と同じだと考えられるもの。

Ｂ．内容は、オリジナルの発話とは違っているが、そのように予測される可能性のあるもの。妥当な予測と考えられもの。

Ｃ．内容を誤解していたり、発想が飛躍しすぎていたりして、妥当とは思われない予測となったもの。

Ｄ．無回答

予測結果を判断するにあたっては、ＡとＢの区別、あるいはＢとＣの区別に迷うものもあったが、評定者２名と相談して判断した。

以下、それぞれのテストについて問題に使った発話と予測の結果を記し、考察を行う。問題文は □ の中に記した。その中の＜　＞は、ナレーションで状況説明をしている部分、［　］は予測してもらう部分である。従って［　］の部分は被験者には聞かせていない。↑は、上昇イントネーションを、↓は下降イントネーションを表している。

テスト１.

＜ここは夜間中学の教室です。生徒と先生は友達のような関係です。今先生が手で鼻毛を抜いています。それを見た一人の生徒の発話です。＞

みんなで鼻毛切り買ってあげたでしょう。↑　［*どうして使わないの*］

予測結果			日本人	留学生
A.			25	17
	「どうして使わないの」ﾀｲﾌﾟ	(21)　＜ 6＞		
	「どうして手で抜くの」ﾀｲﾌﾟ	(1)　＜10＞		
	「あれ使ってよ」ﾀｲﾌﾟ	(3)　＜ 1＞		
B.			3	5
	「また、なくしちゃったの」ﾀｲﾌﾟ	(3)　＜ 1＞		
	「やめなさいよ」ﾀｲﾌﾟ	(0)　＜ 2＞		
	「どうして前もって切っておかなかったの」	(0)　＜ 1＞		
	「使っているの」	(0)　＜ 1＞		
C.			0	4
	「それを先生にあげよう」など	(0)　＜ 4＞		
D.			0	2

（ ）：日本人　＜ ＞：留学生

日本人の場合、「どうして使わないの」とオリジナルと同じ予測をしたものが２１名で多数を占めた。形式もオリジナルとほぼ一致している。「みんなで鼻毛切りを買ってあげたこと」が「今先生が手で鼻毛を抜いている」という現場状況と結びついて「どうして使わないの」「どうして手でぬくの」「使ってよ」「なくしちゃったの」という予測を導いている。その中で「なくしちゃったの」というものは、関心が「鼻毛切りを使うこと」ではなく「贈った鼻毛切り」に向いているとして、Ｂと評価した。

一方留学生で最も多かったのは、「どうして手でぬくの」というタイプだった。また、留学生のほうが予測のバリエーションが日本人よりも多く見られた。その中で「やめなさいよ」という予測は「鼻毛切りを買ってあげたこと」よりも「手で鼻毛をぬいていること」により多くの注意が向けられているものと思われる。

テスト２

＜二人は今、ビルの掃除のアルバイトをしています。黒ちゃんは今日が初めてでまだよくやり方がわかりません。＞

黒ちゃん。

え。

そこ何かこびりついてるでしょう↑。 ［*そういうのちゃんととってくれないとだめだよー。*］

予測結果		日本人	留学生
A. 「もっときれいにふかなきゃだめだよ」「それちゃんととってよ」「もっと注意してください」など、注意や指示をしているもの		24	19
B.		4	8
「それはこうやってとるんだよ」ﾀｲﾌﾟ	(3) ＜7＞		
「とってごらん」ﾀｲﾌﾟ	(1) ＜1＞		
C.		0	0
D. 無回答		0	1

予測には２つのパターンが見られた。一つめのパターンは、「もっときれいにしなければだめだ」というように注意しているものや「それをとってよ」と指示しているもので、「そこになにかこびりついていること」と「今掃除をしていること」が結びついて導き出された予測である。それぞれ２８名中の日本人２４名、留学生１９名がこのパターンの予測をしており、予測はかなり当たっているといえる。

もう一つのパターンは、「それはこうやってとるんだよ」というふうに、やり方を教えているもの、「とってごらん」と見守るものであるが、これはナレーション中の、「黒ちゃんは今日が初めてで、まだよくやり方がわかりません」という部分に影響を受けたものと思われる。

日本人と留学生との間で大きな差は見られないが、「やり方を教えてあげる」ﾀｲﾌﾟの予測が、日本人よりも留学生のほうに若干多く見られている。

テスト３.

＜これは家庭内の会話です。妻が夫に話しかけています。夫は親友の水田と大ゲンカをして今絶交状態にあります。そのせいで今一つ元気がありません。＞

水田さんと絶交してからふぬけみたいにポーッとしちゃって。つきあいたいんでしょ。↑

「やせがまんしないでつきあいなさいよ。↑」

予測結果			日本人	留学生
A．仲直りをすすめているもの。			26	23
「早く仲直りしなさいよ」ﾀｲﾌﾟ	(23)	＜23＞		
「意地張ってちゃだめよ」ﾀｲﾌﾟ	(3)	＜ 0＞		
B．			2	2
「いつまでもいじいじして男らしくないんだから」	(1)			
「だったらはじめから絶交なんかしなければよかったのに」		＜ 1＞		
「本当は仲直りしたいんでしょ」	(1)			
「本当は」		＜ 1＞		
C．			0	2
「でも、もう終わりですから、できないかもしれない」		＜ 1＞		
「これからも元気よくすごしましょうね」		＜ 1＞		
D．			0	1

「はやく仲直りしなさい」あるいは、「意地を張っていてはだめ」という内容の予測をしたものが、日本人２６名、留学生２３名と大多数を占め、オリジナルの発話と同じ内容の予測がなされている。

この他には、「態度が男らしくない」「はじめから絶交しなければよかったのに」という予測も見られたが、これらは、「ふぬけみたいにポーッとしちゃって」という部分にかなり影響を受けていると思われる。

この問題でも、全体的には、日本人と留学生との間に大きな差は見られなかったが、留学生のほうに、「でももう仲直りできないかもしれない」「これからも元気よく」という、仲直りの可能性を否定する、あるいは可能性を考慮していない予測が見られている。

テスト４.

＜相撲の話です。最近の相撲の見方について話しています。＞
だから、あの一、相撲協会に対しても相撲に対しても見てる側がすごい誤解があると思うんですよ。で、今、数字ばっかりにこだわってるでしょ。↑
［*そうでなくて、相撲ってのは印象ってのが大きいんですよ。強いなっていう印象、うまいなっていう印象、それが最近こうみのがされているんじゃないかなぁ。*］

予測結果		日本人	留学生
A. 「本来そうではない」「これではだめだ」「こうあるべきだ」など。		22	10
「本当はそういうものじゃないと思うんですよ」など。	(7) < 0>		
「何か間違ってますよね」など。	(7) < 2>		
「大切なのは数字じゃなくて、すもうの取り方だと思うんですね」など。	(2) < 1>		
「もっと本当は技を見てもらいたいですね」など。	(4) < 6>		
「技の面とかが軽視されてるんですよ」など。	(2) < 1>		
B. 「そうするとこうなる／だからこうだ」というもの、現状の説明を続けているものなど。		6	11
「そうすると、本当の姿がみえてこないんです」など	(4) < 4>		
「何勝何敗とか、何場所連続○○とかね」など	(2) < 0>		
「ですから、すもうの精神みたいなのにもうちょっと目を向けないとだめだと思いますね」など。	(0) < 5>		
「すもうなのに・・」など、その他	(0) < 2>		
C, 「見にくくてなかなかわからないよ」など		0	4
D,		0	3

「数字ばかりにこだわっている」の後に「そういうものではない」「本来はこういうものだ」「こうすべきだ」「それではだめだ」「だからこうなってしまうんだ」といった内容を予測するものが大部分だった。その中で「そうではない／間違っている」というもの及び「（そうではなくて）本来はこうだ／こうすべきだ」と述べているものをＡとしたが、「こうすべきだ」の内容で、相撲の技や内容以外のことについて言っているものは、「印象が大切だ」というオリジナルの発話から離れ過ぎていると判断し、Ｂに入れた。

留学生の予測の中には、スポーツ精神や相撲の精神、相撲の伝統競技としての側面を大切にすべきだというものが見られたが、これらの発想は日本人

の予測の中には見られなかった。なお、Cと判断したものの中に、「見にくくてわからない」「数字がたくさんある」というものがあったが、これらは「数字ばっかりにこだわっている」の部分の「数字」だけを手がかりに予測したものと思われる。

テスト5.

<タイルの話です。イスラム圏の幾何学模様が描かれているタイルについて話をしています。>
その一あれですよね、タイルの場合は、一つ一つの模様がね、こう、常ならびに並ぶことによって、また模様がさらに模様を生むという感じに、こうなって、目がくらくらするようなね、模様に発展していきますでしょ。↑
［*だからね、もう実にタイルとね、幾何学模様ってのはうまくあってると思うんですよ。*］

予測結果			日本人	留学生
A.			0	0
B.			27	16
	「（そこが）おもしろい、すばらしい、美しい」というもの。	(20) < 5>		
	「複雑だ、イスラムの特徴だ」というもの。	(3) < 2>		
	「その発展が次の模様につながっていくんです」など、模様の発展についてのべたもの。	(4) < 1>		
	「だからどう並べるか、全体の構成も考慮すべき」等その他。	(0) < 7>		
	「ずっとこういう幾何学模様のタイルを見ると、頭もいたくなるんだね」	(0) < 1>		
C.	「それはイスラム民族の習慣を保持するためです」など。		1	4
D.			0	8

オリジナルの発話は、「タイルは、並ぶことによって模様が模様を生み、発展して行く。だからタイルと幾何学模様とはうまくあっている」というものであるが、同じ内容の予測をしたものはいなかった。日本人の場合、大多数が「そこがおもしろい」など、プラスの評価を表す発話を予測しており、「だから複雑だ／無限性がある」「そこがイスラム文化の特徴だ」などとあわせて、「そこがどうだ」といっているものが２８名中、２３名を占める。その他の予測として、「模様がつながりさらに全体模様をつくる」というよ

うに模様の発展について繰り返し述べているものがあり、日本人の場合１例を除いて、このどちらかの予測がなされていた。一方、留学生の場合、妥当だと判断されたものの中の５例が、「そのタイルの配合によってもようの色が違ってくる」「だから特にタイルの構成段階では全体像を考慮に入れるのが何よりも大事」などという予測であった。これは、「タイルは、模様がさらに模様を生む」ということから、「並べ方によって模様が違ってくる」ということを連想し、それをもとに予測がなされているものである。このタイプの予測は日本人には見られなかった。

このテスト５では、オリジナル通りの予測をしたものはなく、予測は難しかったことがわかる。この発話のパターンは、一般的な事実（タイルの場合一つ一つの模様が並ぶことによってさらに模様が模様を生むこと）を確認したあと、自分の意見を伝えるものであるが、同じようなパターンのテスト４に比べて、予測の手がかりになるものが少ない。「幾何学模様が描かれているタイルについて話している」という文脈情報を考え合わせても、「タイルは模様が模様を生み、目がくらくらとするような模様に発展していく」という発話内容から「タイルと幾何学模様がうまくあっている」という内容を導き出す必然性は薄い。つまり、両者の論理的な結びつきが強くなく、その予測を促すような語彙的な手がかりもなかったために予測が困難だったのだと思われる。被験者のほとんどは、次に話し手の意見がくることを予測していたが、それは、「模様が発展する」という部分をプラスに評価して、そこがおもしろい、美しいというような方向でとらえたものだった。

一方、テスト４の場合は、相撲の見方の話をしている時に、「今、数字ばっかりにこだわっているでしょ」という発話がされており、「数字にこだわる」という表現がマイナス評価のものであるので、その後に、それはよくないという意味のことが続くと予測するのは自然である。それに加えて、その前に「見てる側がすごい誤解がある」という文脈情報が与えられているのでどういう誤解なのか、その説明が次に行われるだろうとの予測もできる。このように、テスト５に比べて、発話内容自体が語彙を手がかりに自然に導き出されるものであること、文脈情報が多いことなどが、テスト４の予測を比較的容易にした要因であると思われる。

以上見てきたテスト１～５の評価結果をまとめると、表１のようになる。

表１．

	テスト１		テスト２		テスト３		テスト４		テスト５	
	日	留	日	留	日	留	日	留	日	留
A	25	17	24	19	26	23	22	10	0	0
B	3	5	4	8	2	2	6	11	27	16
C	0	4	0	0	0	2	0	4	1	4
D	0	2	0	1	0	1	0	3	0	8

まず日本人の結果を見ると、テスト５を除くテスト１、２、３、４いずれにおいても、２８名の被験者のうち２２～２６名がオリジナルの内容と同じ予測をするという、高い予測率を表している。つまり、「だろう／でしょう」という確認要求表現を用いた発話がされた時点で、次にどんな内容の発話がくるのかがかなり高い確率で予測できているということである。

テスト５の場合、予測は当たっていないが、２８名のうち２０名が「そこがおもしろい」という内容の予測をしており、被験者の予測は、ほぼ一致している。ただ、それがオリジナルの内容と一致しなかったのであるが、それはすでに述べたように、オリジナルの発話の内容が十分な文脈なしでも自然に発想できるものではなかったからだと思われる。

５つのテストの結果を談話の展開の面から見てみると、後に聞き手に対する働きかけがなされている場合は全てのテストにおいて予測がよく当たり、後に話し手の意見が続く場合は、予測の当たるものと当たらないものに分かれている。この結果から判断すると、後に働きかけの続く発話の方が、後に自分の意見が続く発話よりも予測がしやすいといえるだろう。聞き手に提案や注意や非難などの働きかけをする場合は、誰でも納得できる根拠や前提を示して自分の正当性を示す必要がある。自分の意見を伝える場合と違い、自分の発話意図を誤解しないで理解してもらう必要があるので予測のしやすい論理展開になるのではないだろうか。さらに、働きかけを行う場合は、現場の情報、その発話を言ういきさつなどの言語外情報がかなり助けになる。テスト２で言えば「何かがこびりついていること」に「掃除をしている状況」が結びつけば、「それをとらなければならないこと」を考えるのは自然である。このようなことから後に続く働きかけの部分は予測が容易になるのではないかと思われる。

次に留学生の予測について見てみる。まず、無回答のもの、妥当でないと判断される予測が全体で２９例みられた。そのうちの１９例がテスト４、５に集中している。特にテスト５では、無回答が８名で最も多かった。無回答の場合、その理由をアンケート形式で尋ねたが、テスト５の場合、無回答の８名のうち６名が、テープも聞き取れたし内容も理解できたが次に何というかが想像できなかったと答えていた。(注6) つまり、語彙や内容がわからなかったのではなく、予測すること自体が難しかったということである。これもやはり予測の手がかりとなるものが足りなかったためだと思われる。

予測が当たっているものは、日本人に比べると若干数が少ないが、全体的な傾向は、日本人と大きな差はなかった。発想の違いについては、テスト６で「タイルをどう並べるかによって模様が変わる」という発想が留学生５名にまとまって見られ特徴的だと思われたが、それを除けば、日本人も留学生もだいたい同じ内容の予測をしているといえる。

５．まとめと今後の課題

今回の調査の結果をまとめると、次のようになる。

①確認要求表現を用いた発話の後に、提案、勧め、非難、注意など相手に対する働きかけがくる場合、予測はかなり当たっていた。

②後に意見を述べる展開になっている場合は、予測が当たる場合と当たらない場合があった。予測が当たらなかった場合も、日本人の予測した内容は２０名（71%）がほぼ一致していた。

③留学生の場合、予測が妥当でないもの、予測できなかったものが２９例あり、日本人に比べて予測が当たる率は低かった。妥当だと思われる予測の内容に関しては、日本人と留学生との間に大きな差は見られなかった。

以上の調査結果から、確認要求表現に続く発話の予測は、その発話の機能によって難易に違いがあること、留学生の場合、予測は日本人に比べて全体的に弱いが、発話の機能によって予測の難易が違ってくる点では日本人と同じであることが明らかになった。また、被験者の予測の内容を見ることにより、確認要求表現を用いて提示される情報と他の文脈情報とがどのように結

びついて予測がなされているのか、どの文脈情報を重視するかによって予測の方向がどう変わってくるかなどについても観察することができた。

今回は、確認要求表現の後に続く発話に関して行った１０問の予測テストのうち、相手への働きかけが続く場合と、話し手の意見が続く場合の２つのパターンに絞って結果の分析を行った。残りの５問は、確認要求表現の後に情報提供の発話が続くという談話展開のものであるが、これらの分析も引き続き行い、今回の結果と比較したいと思っている。

【注】

(1) 堀口（1989 p.1）など

(2) 内田他（1995）「予測文法研究（１）：「が」と「は」の予測機能について」『言語文化と日本語教育』第９号（pp.134-159）お茶の水女子大学日本言語文化学研究会など

(3) 蓮沼（1992 pp. 46-52）

(4) 瓜生（1996 pp.16-25）

(5) 留学生の母語は韓国語11名、中国語14名、タイ語、ポーランド語、英語各1名となっている。

(6) 無回答の理由は以下のようになっていた。

	テスト1	2	3	4	5
わからない言葉が多すぎた／テープが聞き取れなかった	0	1	1	1	1
内容は理解できたが、次の発話は想像できない	1	0	0	2	6
回答なし	1	0	0	0	1
計	2	1	1	3	8

【主な参考文献】

鮎澤孝子 1988「『話しことば』の特徴－聴解指導のために－」『日本語教育』62号

瓜生佳代 1996「文末の『だろう』の運用に関する考察」平成７年度お茶の水女子大学院修士論文

仁田義雄 1989「現代日本文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版

蓮沼昭子 1992「日本語の談話マーカー『だろう』と『じゃないか』の機能－共通認識喚起の用法を中心に－」『第一回小出記念日本語教育研究会論文集』

平田悦朗 1991「ニュース文の構造と聴解の予測能力について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』44巻

堀口純子 1989「コミュニケーションにおける聞き手による予測の型」『文芸言語研究言語編』第7号 筑波大学

寺村秀夫 1987「聞き取りにおける予測能力と文法知識」『日本語学』６号３巻 明治書院

土岐哲 1988「聞き取り基本練習の範囲」『日本語教育』62号

マイケル・スタッブズ 南出康世／内田聖二共訳 1989『談話分析』研究社

John.W.Oller 1979 "Language Skill as a Pragmatic Expectancy Grammar" *Issue in Language Tests at School* (pp. 16-35), Longman

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻）